

ホップべと病の新しい省力防除体系

(農試環境部)

1 背景とねらい

ホップ栽培におけるべと病の防除は現在、銅水和剤の茎葉散布によっているが、萌芽期から収穫直前まで栽培暦で16回、現地の防除実績でも14回程度の散布が行なわれており、ホップ栽培上、最も労力を必要とする作業の一つである。したがってホップ省力栽培の上で大きなネックとなっており、防除の簡略化に対する要望が強い。

農試では、これまで本病に対する薬剤の効果を検討してきたが、この度、卓効を示す新しい農薬が確認された。この剤を使用することにより、生育初期の茎葉散布が省略できるため、慣行の防除法よりも大幅に省力化でき、しかも防除効果が高い。この剤の使用に伴って現在の防除体系が一部変更されることから、本剤の使用法および使用上の留意点を紹介し参考に供する。

2 技術内容

(1) 新しい防除体系は以下のとおりである(図1参照)。

ア. メタラキシル2%粒剤(リドミル粒剤2)を4月下旬~5月初旬に土壌施用する。

イ. 6月下旬から、慣行のとおり、銅水和剤の茎葉散布を定期的に行なう。

新しい防除体系



(参考) これまでの慣行防除体系

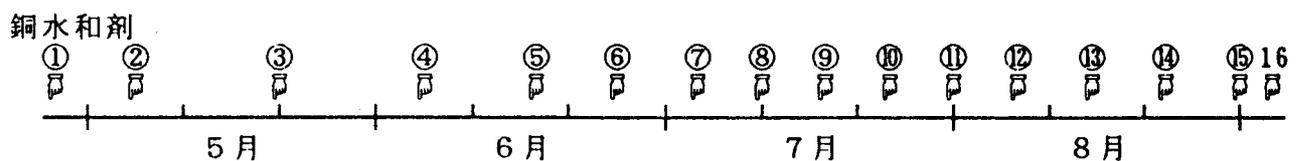


図1 新しい防除体系(上)と慣行防除体系(下)

(2) メタラキシル2%粒剤の使用法は次のとおりである。

ア. 使用回数は1回を厳守する。

イ. 施用量は1株当たり20gとする。

ウ. 施用の方法は株元土壌混和または表面施用する。

エ. 使用時期は株ごしらえ期~選芽期にあたる4月下旬~5月初旬である。

オ. 本剤を使用することにより、銅水和剤による茎葉散布は6月中旬まで省略できる。ただし6月下旬からは慣行の散布を行なう。

3 指導上の留意点

- (1) メタラキシル2%粒剤はべと病の特効薬である反面、耐性菌の出現が懸念されている剤でもあるので、使用回数、使用時期は厳守する。
- (2) 本剤は根株に直接触れたり、根株の真上に散布されると、薬害を生じることがあるので注意する(図2)。
- (3) 本剤は施用後60日前後の残効があると考えられるが、それ以前に発病した例もあるので観察を怠らない。

4 試験成績の概要

表1 試験例から見た防除効果と残効期間

試験場所・年次	施用日	施用量	初発時期から見た残効期間	防除効果		備考		
				茎葉	穂花			
岩手	56	4.27	10g	66<	○	—	ひこばえ(幼芽)のべとも抑える	
		"	20g	66<	○	—		
		5.14	10g	49<	○	—		
		"	20g	49<	○	—		
	57	4.26	10g	74<	?	△	20gで穂花べと抑える 葉は無散布でも無発生	
			20g	74<	?	○		
	58	4.30	10g	46~75	○	△~×		
			20g	46~75	○	○		
福島	56	5.17	10g	<26	○	○~○	株周50cmに施用したため(?)残効短い が、10gでも穂花べとまで抑えた	
			20g	<26	○	○		
			10g*	<26	○	○		
			20g*	<26	○~○	○		
	57	4.28	10g	66~78	○~○	○	慣行並だがやや発病多 幼芽べとも抑える	
			20g	56~66	○	○		
	58	4.22	10g	70~80	○	×	7.21までは低く抑えた が、その後急進展	
			20g	80~90	○	○		
山形	56	4.25	10g	69~74	○~○	—	幼芽べとをよく抑える 慣行で7.3以降多発 8.2まではよく抑えた が、以降は多発	
			20g	69~74	○~○	—		
			4.27	10g	<71	○~○		○
				20g	71~75	○~○		○
	57	4.25	10g	?	—	○	茎葉のべとは少発生	
			20g	?	—	○		
	58	4.22	10g	?	—	○	茎葉のべとは少発生	
			20g	?	—	○		
長野	56	5.8	10g	33~45	○~○	—		
			20g	33~45	○~○	—		
平均値				≒67日				

注) ○は慣行より優れる、○は慣行並、△は慣行より劣る、×は無散布並を示す。

*は銅剤の茎葉散布あり、他は無し。